

107 視線誘導補助線の役割とは

《聖マタイの召命》・《最後の晚餐》・《岩窟の聖母》

2024

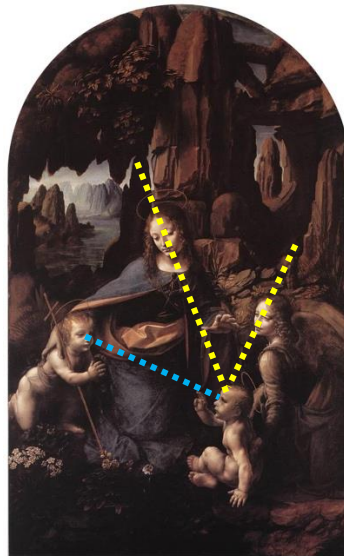
真鍋友範

1 視線誘導補助線

視線誘導補助線とは、ルネサンス・バロック期の絵画を構成する上で、重要な画面構成要素だ。

《聖マタイの召命》・《最後の晚餐》・《岩窟の聖母》について、順に見て見よう。

2 《岩窟の聖母・ロンドン版》



《岩窟の聖母・ロンドン版》レオナルド・ダ・ヴィンチ

まず、有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの旧約聖書外典から題材をとった、と伝えられる《岩窟の聖母・ロンドン版》の例をみよう。

まず気付かされるのは、この岩窟内という自然環境で、いかにして観衆の視線を、イエスに集中させるか、という難題に対し、レオナルドの編み出した手法だ。

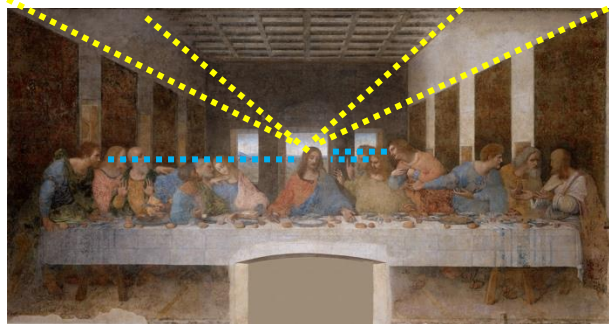
レオナルドは、【頭部中心軸線と視線】によってイエスの存在を暗示する手法

をとっている。

この事実に対し、レオナルドの弟子たちが、レオナルドがミラノを去った後にレオナルドの弟子たちが合作して描いたと推測できる《岩窟の聖母・ルーブル版》では、頭部中心軸線が、しっかりとイエスに向かっていない。つまり意識されて描かれていないのだ。

この事実から、《岩窟の聖母・ルーブル版》は、レオナルド作品では無いと断定できる程の重要な欠点なのだ。

3 《最後の晩餐》

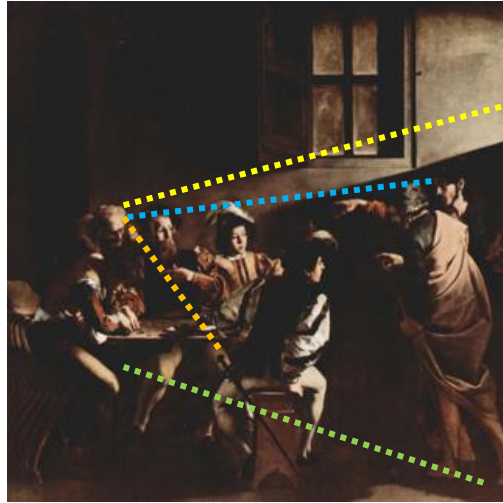


《最後の晩餐》レオナルド・ダ・ヴィンチ

イエスのこめかみ付近に集中する【一点透視図法】の収束線が、視線誘導補助線となっている。

また、使徒たちの多くの視線は、イエスへと向けられている。

4 《聖マタイの召命》



《聖マタイの召命》カラヴァッジョ

カラヴァッジョの作品「聖マタイの召命」では、その視線誘導補助線が分かりにくい。

なぜなら、登場人物の動作を詳細に検討しなければ、見えないのだ。

カラヴァッジョは、レオナルドよりも遥かに複雑な視線誘導補助線を設定しているのだ。

背を向けて座る納税者側の若い人物の、腰の剣の軸線を上方に辿ると、老収税史の頭部にある光点に達する。

この光点はどこからのものか、という検証が必要となる筈だ。

結論は、右側高窓からの光に紛れ込んで差し込んだ、父なる神からの導きの光線であると理解できそうだ。

次に存在する補助線は、イエスの視点と、廻した手の甲を結ぶ延長線だ。

手を廻して、向こう側の人物を呼ぶ場合、廻した手の止まる位置は、相手の顔付近だからだ。従って、イエスの視点から手の甲を伸ばした視線の先までの誘導補助線が存在する。

最後にペテロの動作を見よう。

ペテロの足元に注目だ。両足の軸線を延長すると、眼鏡の老収税人の足元に向かっていている。

これらの補助線が総合されて示しているのは、向こう側にいる老収税史が、目

指す召命の対象人物である聖マタイの存在場所なのだ。

5 結論

これらのように、優れた作品では、画家によって構想された重要な視線誘導補助線が隠されている。